熊日1964.04.11

水俣病に考える

(11)

黒いドベ

病源の恐怖も消えて

飛躍を待つ百間港

昨年七月、水俣市の商工会議所、海運組合、一般市民などによって「水俣港改修促進期成会」が発足した。市の海の玄関水俣港、とくに市民の利用度が高い百間港の改修を、一日も早く実現するために市民運動として推進しようというのがねらいだ。

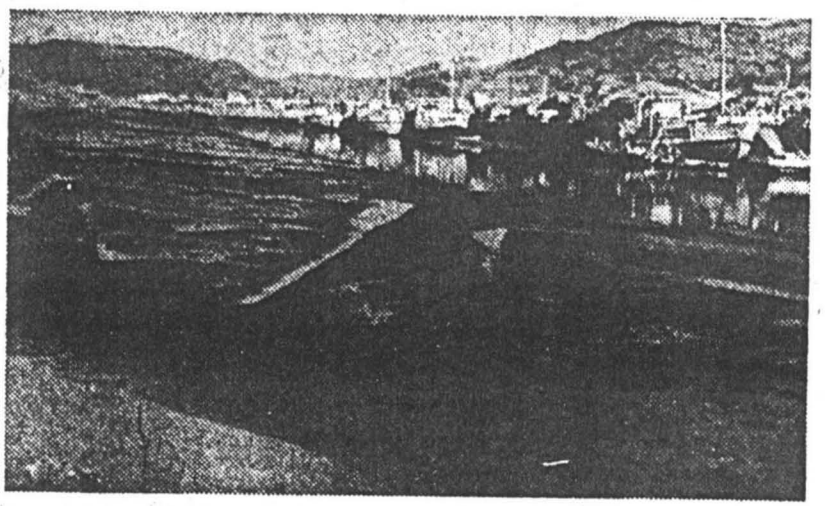
百間港は背後地などの条件もそろっている県下最良の港だった。それが年々浅くなるばかりで、干潮時には小型船が入港できるだけの現状だ。天草航路の起点である浮き桟橋の南側には、三十六年八月、長さ二百十五㍍の新岸壁が完成、一万㌧級の大型船が入港できる施設はできた。ところが港内が浅いので、大型船は接岸できずに沖に停泊、ハシケで積みおろしている始末。さらに新岸壁の内側にできる予定の野積み場がなく満潮時でさえ荷物の積みおろしができない。このためせっかくの岸壁も無用の長物になっている。「一日も早く港内のしゅんせつを」というのが市民の願いだ。野積み場の埋め立てには、港内の〝しゅんせつ土〟をあてることになっている。一石二鳥の名案だ。だが漁民から「ドベ（沈殿土）をしゅんせつすれば、海底に沈んでいる水俣病の原因になる物質が海中に広がる」と抗議が出た。そして補償問題がからんだため県もサジを投げ、名案も宙に迷った形だった。

〝ドベ〟――ドロドロになったガタ土の名称である。奇病騒ぎが起こった三十一年、厚生省に提出する書類に〝ドベ（沈殿土）〟と書いたのがその名のはじまりだ。浮池水俣市医師会長が名付け親。奇病の原因物質を含んだガタ土のイメージにぴったり。いらい〝ドベ〟ということばは水俣病と切り離せない存在になった。ドベの堆（たい）積が多いところは百間港の周辺、恋路島に向かって突き出た明神岬の南側一帯がとくに深い。「調査団がきたとき長い竹を突き刺してみた。力をこめないでも十㍍くらいは楽に通った。深いところは十二、三㍍もあるだろう」と市漁協の中村参事はいう。

昨年八月、市の依頼で水俣港内のドベの調査研究を続けていた熊大医学部の入鹿山教授（衛生学）は「ドベには水俣病の原因とみられる有機水銀は含まれていない」と回答。「今後問題を起こさいないためにも、早急に徹底的なしゅんせつをしたが良い」と述べている。ようやく〝しゅんせつ〟に踏み切った県は昨年末の県議会で、水俣港改修費として千七百万円の予算を組んだ。さる一月には加茂野県港湾課長らが市を訪れ、百間港のしゅんせつに伴う漁業補償問題について、漁協代表らと話し合った。具体的な点については進展しなかったが、話し合いの開始は、改修費工に一歩前進したものと好評。「ドベは早く取りのぞいてほしいと、前から県に言っていた。病源の物質がなくなれば、市民にも安心感を与えることになる」と中村参事も語っている。水俣港の改修実現はそう遠い日ではなかろう。

同港の貿易港指定は三十一年。三十五年には重要港湾に指定された。県水俣港務所の調べによると、三十八年中の同港の取り扱い貨物は、国内貿易が移出二十五万八千四百四十二㌧、移入が四十九万六千二百八㌧で計七十五万四千六百五十㌧。外国貿易が輸出三万百三十九㌧、輸入八万四千五百十七㌧の計十一万四千六百五十六㌧。三十七年は内貿四十三万九千八十九㌧、外貿二十三万四千九百六十七㌧なので、外貿はやや減っているが、内貿は大きく伸びており、総計では二十万㌧もふえている。外貿の中でも韓国向けの竹材などの輸出は伸びている。百間港からドベが消えるとき――それは水俣港が飛躍へのジャンプに踏み切るときであり、水俣病に対する不安が市民の胸裏から消え去るときである。

水俣港付近略図


いまわしい病源が潜んでいるような〝ドベ〟一百間港
二分の一はドベで埋まり船の出入りには難航している